

この冊子を手にする皆さんは、いまどのような思いに満たされているだろうか。合格の喜びも一段落し、さあこれから、という期待と不安が入り交じっている状態だろうか。皆さんが大学生としての生活を始めるにあたり、一つだけ伝えておきたいことがある。それは、これから本当の学びが始まるのだ、ということだ。これまでさんざん勉強してきたのに、と思われるかもしれない。しかし、大学に入るための勉強と、大学に入ってから学びはまったく違う。大学で学んで欲しいことは、山ほどある。専攻する言語・地域、専門の分野、教科外の活動や海外での体験、社会貢献など。しかし、もっとも重要なのは「知」を形成することである。知とは、「何か」を知っていることではない。「何か」について考えることができることである。問題に答えることではなく、問題を組み立てる力だ。受験勉強を通じて身につけてきたのは、与えられた問題に対して的確な答えを出すことだ。しかし、現実の社会において、また様々な学問の分野においても、しばしば正しい答えは存在しない。どのような角度からみるのか、また短期的にみるのか、長期的にみるのか、誰の立場に立ってみるのか、により、問題の設定も答え方も変わってくる。宇宙開発にせよ、原子力発電所にせ

未知との遭遇のために

宮崎恒二

よ、また途上国への援助の在り方にせよ、家族の在り方にせよ、様々な問題の立て方があるのだ。

大学では、問題の立て方を問題にすることを学んで欲しい。そのための第一歩は、疑うことである。当たり前だと思ってきたことを、様々な角度から見直してみることである。さいわい、東京外国語大学では、いやおうなく異なる言語、異なる文化と接触する。未知との遭遇は、日常生活や、その中で通用してきた考え方の常識を覆し、問題の立て方から考えることを要求する。

大学への入学は、人の生の一つの大きな節目である。ある状態から別の状態に移る、それが節目だが、受験に集中してきた生活から脱けだし、一人暮らし、あらたな友人関係、目新しい活動が始まる。その中で、自分のいる場所、自分が何者か、不安を感じることもあろう。目標が見えなくなったりと感ずることもある。しかし、恐れなくて欲しい。不安は、確実だと思っていたことが崩壊することから生まれる。それは未知との遭遇なのだ。疑いの始まり、「知」の始まりなのだ。性急に答えを求めるとでなく、そこから、本当の学びを始めてほしい。